

Preferable position からみた重障児の変形と呼吸運動パターンについて

松島昭廣 国立療養所富山病院

児が日常生活時にとっている姿勢、即ち Preferable position より股関節脱臼（股脱）、脊柱側彎、胸郭変形の実態と、特に重度群児の体位変換にともなう呼吸運動パターンにつき検討を試みた。

対象ならびに方法；入院児（者）160 名中、20 才以下の全員 106 名である。preferable position は背臥位、腹臥位、そして坐位と立位に 3 区分した。股脱の程度は X-P 上より Lange の分類に従がい、側彎は理学的所見と X-P 所見より postural、structural scoliosis に区分した。胸郭は背臥位で胸骨下端における腹側・背側を各々ハンダ線で横断面の採型を紙上にトレースし、厚さ、扁平度、捻転度を計測した。呼吸曲線は無線ポリグラフを使用し、主に訓練時に行う体位変換により呼吸パターンの評価を行なった。

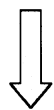
結果；1) 股脱（I 度以上）、structural scoliosis は各々 45 %、50 % に認め、共有するものの 80 % は背臥位児で占めた。経年的にみると growth spurt 時期に増悪が加速化している。

2) up right 群は加齢と共に胸郭発育を認めるも、背臥位児では 9 才頃より大半が下まわり、growth spurt 時期以降では格段の差を生ずる。3) 背臥位、ねたきり児は扁平度、捻転度とも他群より強く、扁平度は最高 1.0、捻転度は 42° に及んだ。

4) C カープ型の胸椎型側彎は当然のことながら胸郭の強い非対称を示し胸郭変形に対する影響が大である。5) 重度群においても背臥位より腹臥位で呼吸運動面に改善を認むものが半数以上あり、特に呼吸の深さを増すものが多かった。

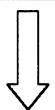
まとめ；股脱、側彎、胸郭変形等は互いに増悪因子として関連しており、背臥位生活児でかつ低運動レベル群では呼吸という生命予後に直接問題をなげかけてくる。growth spurt 前に変形・拘縮を最少限にとどめる療育中での配慮、また最重度群の児でも体位変換も含め bed 内での訓練プログラムを考慮すべきである。今後重障児にも適

応可能な呼気ガス分析装置を導入し、呼吸運動・機能面についての検討をおこなってゆきたい。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



児が日常生活時にとっている姿勢、即ち Pre-ferable position より股関節脱臼(股脱)、脊柱側彎、胸郭変形の実態と、特に重度群児の体位変換にともなう呼吸運動パターンにつき検討を試みた。